

随筆

「流し」の下

(社)雨水貯留浸透技術協会理事長

松田 芳夫



私は水が嫌いである。学生の頃の東京オリンピック大渴水を別にすると、水不足で苦労した記憶はあまりなく、むしろ水が多すぎたり、乾燥していてほしい処に水があったりして困った思い出ばかりである。

私が自分で意識している水との付き合いの始まりは昭和21年の冬である。お袋は疎開先の茨城県の今は「つくば市」の外れになる、とある農家の庭先の井戸端で毎朝洗濯をしていた。

井戸といってもポンプはなく、いわゆる「つるべ井戸」で長い竹竿の先端にぶら下がっている桶で一回一回手で水を汲み上げるのである。当時は今より冬はよっぽど寒く、夜、冷たいフトンに潜り込むのも、朝、暖まった寝床から起き出すのも、勇気と決心の要る大仕事だったが、母親想いの私は朝のお袋の洗濯にはいつも付き合った。

もちろん、小学校入学前後の小僧っ子に手助けすることもなく、見ているだけであるが、どんなに寒くても井戸の水は暖かく、湯気が立ち昇っているのが不思議であった。汲み置きの手がちぎれそうなほど冷たい水と違って、井戸の水は暖かさが子供心にも親しみを感じさせる存在であった。

東京へ帰って来た先は、もとの家が空襲で焼けてしまったので繁華街のマーケットの部屋が6畳と3畳の2間しかない長屋であった。親子6人がどうやって寝たり勉強したりしていたのか今考えると不可解であるが、3年振りに故郷へ帰れたという嬉しさと住めば都という気持ちからか、とに

かく元気に生活していた。

そんなわが家にもある日、下水道が引かれることになった。昭和25年の朝鮮戦争の頃であったろうか。長屋の下水道だから、裏側の路地に各戸からの排水を集める本管が一本引かれ、そこへそれぞれの家からの下水を枝管を経由して流し込むのである。本管といっても直径15センチくらいの赤茶色の焼物の管で、現代の陶管などという高尚なものでなくほとんど土管といってもよいくらいのものだ。各戸から出てくる枝管との合流点は四角いマスになっていて(マンホールと呼んでいた)直径30センチくらいの丸いコンクリートのフタがついている。

どの家も狭くて台所で洗濯もできないから、洗濯するときはマンホールのフタをとって、タイヤを持ち出しホースで台所の水道の蛇口から水を引いて行うのである。

下水道は、皆が慣れていないところに突然敷設されたのだから当然トラブルも多かった。とにかく毎月のように管が詰まるのである。お袋は下水管が詰まるとイライラして怒りっぽくなり小学生の私に掃除の手伝いを命じるのである。詰まるとしても自分の家の領分の枝管でなく、共用の本管が詰まるのだから、どの家の不始末のせいで詰まったのか分からない。なにせ、お互い生まれて初めて水洗便所を使う連中のことだから、およそ何でも便所に捨てる。新聞紙、布切れ、タバコの空箱、うっかりするとネズミの死骸まで混ってい

る。とうとう誰に教えられるともなく女性の生理現象のことまで知ってしまった。

竹を小割りにして薄く削ったものを針金でしばって、つないだ長さ4~5mの長いペラペラの突き棒で下水管の中をつつ突くのは愉快的仕事ではない。私が汗水たらして必死で作業するとき、お袋は水道の水をバケツに溜めて何回も流しようやく貫通する。作業が終わったとき大げさにいえばウンチまみれである。

そんなわけで私もお袋も水洗便所が嫌いになった。平成の御世、御殿か宮殿のような豪華ホテルのトイレで用を足していても、この管の先はどうなっているのか気になって落ち着かないのが育ちの悪さを物語る今の私である。

当時はネズミが沢山住みついていて。あまり食料も豊富でないのに人間と競争で頑張っていた。夜になると天井裏でネズミの運動会が行われた。人間たちは針金製の籠、いわゆる「ネズミ取り」に油揚げや薩摩揚げの一片を仕掛け、間抜けな一匹がかかるとその始末は私の仕事だった。タライに水を張り、その中へ容赦なくネズミの入ったネズミ取りの籠を浸す。籠の中のネズミは空気を求めて走り回り、もがき回り1分もすると溺死してしまう。籠からネズミの死骸を尻尾をつまんでとり出し、ゴミ箱に放り込んで一巻の終わりである。

台風は今と違って毎年のように襲来した。台風が来るといって、戸や窓に板や木材で補強し、停電に備えてローソクや懐中電灯を用意した。屋根からの雨漏りに備えてフトンだけは濡らさないようにと、押し入れのフトンを引っ張り出し部屋のまん中に積み上げてその上を新聞紙や包み紙で覆う。空いた押し入れの上段には油紙を敷いてその上に空きカンやドンブリを並べておく。雨が強くなってトタンの屋根がザーザーいようになるとやがてポタンポタンと雨水が落ちてくる。それを上手に容器に受けるよう注意深く見張るのが私の仕事である。

雨台風のひどい時は文字通り徹夜で雨漏りと闘うのである。どんなに雨を呪ったことか。雨なんか降らない方が良く心の底から思ったものである。

台風一過、お天気になると屋根の修繕だ。お袋

が支えてくれる梯子を登って屋根のトタンにコールトールを塗る。穴の空いているところを見つけると布切れを張り、その上をコールトールでなでつけておく。トタン屋根を葺き替えるのは費用が高くてそう度々はできないので少しでも長持ちさせようと一生懸命作業に励む。後年、トタン屋根を腐食させる最大の原因がサビ止めに塗るコールトールから出るガスであると報じられたときは思い出しても悔しかった。なにしろわざわざ手間をかけて腐らせていたわけであるから。

トタン板に泣かされたのは台所の「流し」でもあった。家に水道の蛇口が1つしかないから、流し場は炊事だけでなく洗面、手洗いなどすべての水仕事の間であり、流しはいつも水で濡れている。

木製の流しのときは板の表面に白っぽいカビが生じヌルヌルして気持ちが悪かったが、トタン張りの流しに買い替えたときは、お袋が大喜びして家の中が明るくなったのが子供心にも嬉しかった。

しかし、現代のメッキ層の厚い亜鉛鉄板と異なり、当時のトタン板は数ヶ月もすると穴が空いたり隅のハンダ付けがはがれたりする代物である。やがて流しから水が漏るようになり、下にバケツを置いて漏水を受ける破目になる。流しの下はいつもジメジメし、台所の床板も湿ってカビ臭く、揚げ板を開けて床下を覗きこもうものなら、それこそナメクジ、コオロギ、足がやたらにあるヤスデみたいな虫が山のようにいるので腰が抜ける。この恐怖の体験はトラウマとなって一生忘れられない。モダンで水まわりは全てステンレスかホーローという現代のマンションに住んでいても私にとっては「流しの下」は鬼門である。セッケンや予備の歯磨き粉を取り出そうとして流しの下扉を開けるのは今だに及び腰である。生物の世界も進化していてナメクジどころかエイリアンのような恐ろしい宇宙生物が飛び出て来るかも知れないのだ。

私の幼年時代は水との闘いであった。早く大きくなって水の漏らない流しのある、屋根から雨の漏らない、そして下水道の詰まらない家に住みたいと切望した。そして水が憎くて仕方がなかった。私の心の奥底には今だにその痕跡が残っている。

母はおかげ様で昨年(平成16年)90歳の卒寿を迎えることができた。